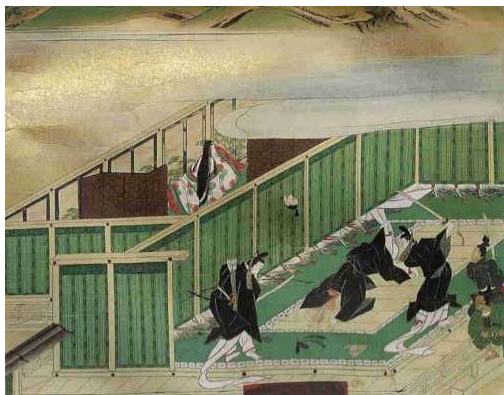


## 茜色の歌姫



## 第一部 乙巳の変



多武峰縁起絵巻

戊申に、天皇大極殿におはしに御ます。古人大兄侍りはべ。中臣鎌子連、蘇我入鹿臣の、人と為り疑い多くして、  
昼夜剣持けることを知りて、俳わざおき儼に教へて、方便たばかに解かしむ。入鹿臣、咲わらひて剣を解く。入りて座に  
侍り。(中略) 中大兄、子麻呂等の、入鹿が威に畏れて、便めんら旋ひて進まざるを見て曰わく、「咄やあ嗟」との  
たまふ。即ち、子麻呂等と共に、出其不意ゆくりもな、剣を以て入鹿が頭肩やがを傷り割そこなふ。入鹿、御座に転び就き

て、叩頭みて曰さく、「当に嗣位に居ますべきは、天子なり。臣、罪を知らず。乞ふ、垂審察へ」とまうす。天皇大きに驚きて、中大兄に詔して曰はく、「知らず、作る所、何事有えりつるや」。中大兄、地に伏して奏して曰さく、「鞍作、天宗を尽し滅ぼして、日位を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代えむや」とまうす。天皇、即ち起(た)ちて殿の中に入りたまふ。佐伯連子麻呂、稚犬養連網田、入鹿臣を斬りつ。是の日に、雨下りて潦、水庭に溢り、席障子を以て、鞍作が屍に覆ふ。〔日本書紀〕

卷第二十四)

## 第六章 大業 645

雨中を悄然と河辺宮まで戻った大海人皇子は、高熱を発して寝込んだ。それから十日、熱になされ、起きあがることもできなかつた。

やつと熱が去つた後、舎人の置始比等より、この間の経緯を聞いた。

板蓋宮で蘇我麁作が討たれ、甘樫丘の蘇我の邸が焼かれた後、蘇我の傍流である石川麻呂、赤兄、日向らは、すべて降伏した。

宝大王は病に倒れた。己が御子たる葛城皇子が、鞍作を惨殺する様を眼のあたりにし、心痛のあまり腹の子が流れ出たらしい。宝大王は、その御位を弟の軽皇子に譲り、山背なる有馬の湯に籠った。御身のみならず、その御心も深く病まれているという。葛城皇子は、あえて板蓋宮で凶行に及び、母なる大王の情人を殺し、その母を病に追い込み、鞍作の種なる腹の子を葬り去つたのだ。

大王位に即いた軽皇子は、豊日大王と名乗った。血に穢れた板蓋宮は、大王の宮にはふさわしくないとして、難波の長柄宮を王都と定めた。葛城皇子をはじめ、ほとんどの王族・大官は難波に移った。

蘇我麁作が撰政に担いだ古人皇子は、恭順の意を表すために髪を剃つて僧となり、吉野宮に移った。しかし豊日大王は、古人皇子を蘇我と組んで国を傾けようとした逆賊として追討するこ

ととし、葛城皇子を大將軍とする軍が差し向けられることになるらしい。

「古人皇子が討たれれば……」

大海人皇子は、褥の上に坐して粥を口に運びつつ、呟いた。

「飯豊大王の血筋は、絶えることになるな……」

すなわち、蘇我を討ち滅ぼした異母兄や、豊日大王こそが、真の大王家よりその御位を篡奪したことに他ならない。

「比等よ……」

ふと、皇子は問うた。

「亜那は……鏡郎女は、今はいずくに？」

「さて」

比等は首を傾げた。

「難波に移ったとも、三輪に留まったとも、さまざまな噂があり、いずれとも……」

「そうか……」

「皇子が案じたまえるは、亜那の行方であろう」

古くより皇子に仕える置始比等は、皺の刻まれつつある貌を穏やかにほころばせた。

「三輪へ人を派し、確かめさせたまえるや」

「否」

皇子は頬を赤らめ、首を振った。

「病が癒えた後、吾自ら行く」

「来ずともよい」

背後で声がした。

声の方を見た皇子は、立ち上がった。

亜那が、屋の入り口に立っていた。

亜那は、髪を女童のように結び上げ、薄紅色の袖長の袍を纏って女嬬のごとき装いをしていた。

「何時、ここへ……」

眼を見張る皇子に、亜那は小首を傾げて笑みを浮かべた。

「昨日より」

「昨日？」

皇子は置始比等を振り返った。比等は、当惑げに首を振った。

「女嬬に化けて、この宮の厨で働いていた。誰も気づかなかった」

「されば」

比等は笑った。

「皇子の御世話は、この女嬬に任せよう」

と言い、拝礼して退出した。

大海人皇子は、亜那と二人きり、向かいあい、しばし黙した。亜那の笑みがしだいに強張った。亜那は俯いた。

「巫那よ……」

皇子は手を伸ばし、巫那の頬に触れた。巫那は貌を上げ、恥じらい、俯いて言った。

「鏡郎女より、三日かぎりとして赦しが出た」

「鏡郎女が？　ここへ行け、と？」

巫那は首を振った。

「いづくへ行け、とも郎女は言わなかった。しかし、他に行く所もない」

言うなり巫那は、皇子の首にしがみつき、胸に貌を埋めた。頬を涙がほしい、喉から嗚咽が漏れた。

「巫那よ」

皇子は、恐る恐る、巫那の背を抱き、囁いた。

「三輪の暮らしは、辛くはないか」

「辛く、ない」

巫那は、皇子に抱きついたまま、鼻をすすって応えた。それから貌をあげた。眼は濡れていたが、唇は微笑んでいる。

「鏡郎女は優しい。吾を、だいじにしてくれる。伊勢で、皇子と共に住んでいた時のように」

しかし……、と言いかけて、巫那が皇子の本意を悟って眼を臥せたのに気づいた。何も言えぬまま、またも、二人は黙すしかなかった。

「皇子よ」

巫那は、皇子から身を話し、俯いたまま言った。

「吾は、板蓋宮にて、蘇我大臣を……」

「巫那」

遮おほえろうとした皇子を、巫那は手で制した。

「吾は、大臣の、ふぐりを碎いた」

巫那は眼を逸らし、唇を噛みしめ、遠くを見つめるように続けた。

「そのあと、皇子の……」

「巫那！」

皇子は、巫那の両腕を掴んで叫んだ。

「言うな！」

「……吾は……土蜘蛛……」

それから再び貌を向け、じっと皇子の貌を見つめた。

「だが、皇子の前では、巫那で、いたい」

同じ頃、難波――。

「さらば」

葛城皇子は貌を響しめ、傍らに膝を突く中臣鎌なかのとみのかまこ子に問うた。

「鏡郎女は、三輪の地を離れぬというのだな」

難波にいそぎ建てられた飯の宮の周囲で、木に釘を打ち込む音が続いていた。手のひらを広げたほどの長さのある、三角錐の形をした釘を、山から切り出した古木に、半日かけて打ち込むの

である。

難波は、不意に押し寄せた王族・大官の宮や屋敷を建てるため、やかましい槌音があちこちに響き、使役にかり出された壮丁どもが、忙しく働いていた。

「難波は、軽皇子……否、大王が長年、住みたもうた地。難波に不案内な皇子は、吾等が三輪に留まっていた方が、何かと都合がよいのではないか……と、鏡郎女は、そのように」

確かに……と、葛城皇子は思う。鏡郎女と、その配下の土蜘蛛は、蘇我一族の討伐に際し、大きな功を挙げた。とはいえ、完全に葛城皇子に服したわけではない。土蜘蛛の邑を難波に置けば、鏡郎女が豊日大王に近づかぬとは限らない。あの遊び好きの大王とその一族が、土蜘蛛と手を結ぶ事態は避けたい。

そういう己が腹を、鏡郎女に読まれており、そう読んだことを隠そうともしない郎女の態度が、皇子の痛に触った。

「明日、吉野へ向けて発つ」

葛城皇子は言った。吉野に籠もる古人皇子を討つためである。

「軍は一日とかかるまい。古人皇子を討つた後、三輪を訪なう。そう、郎女に伝えよ」

「一日とかからぬ……と言うことは」

鎌子は呟いた。

「古人皇子と、その妃や御子は、残らず……」

「皇女を独りのみ、生かす」

葛城皇子は言った。

「そして、吾が妃とする」

「古人皇子の皇女を、妃に？」

いぶかしげに問う鎌子に、葛城皇子は、胸を張り、とくいげな笑みを作って応えた。

「飯豊大王の血筋を、絶やすこともあるまい」

吾が后とすれば、なにごとか、使い道もあるだろう……、と皇子は言った。

「厨戸皇子と蘇我馬子が編んだ国史、国栖にあつたという七枝の剣。そして、飯豊大王から伝わる尊い血筋。やがて、鎌子よ、吾等が語り合つた新たな国を造る時まで、すべて吾等が掌中に収めておかねばならぬ。さらに、そこで新たに建てた国を、飯豊大王の血を引く皇子に譲るとすれば、大王の御位をめぐり、大きな争い諍いが起こることを防げよう」

鎌子は、瞬きもしなかった。葛城皇子は、己が言に、独り頷きつつ、言った。

「吾等が大業は、始まったばかりぞ、鎌子」

大業――。

幾度、葛城皇子と中臣鎌子は、その言葉を語り合つただろう。

鎌子以外に、その言葉を漏らしたのは……鏡郎女のみだった。

あの夜、三輪の箸墓に大海人皇子を随れて馬を走らせた。鏡郎女は、葛城皇子のみに舟橋を渡らせた。

生い茂る樹木に覆われた箸墓の塚に足を踏み入れた瞬間、皇子は背後から、股間を蹴り上げられ、うずくまった。二人の女が皇子を取り囲み、衣服をすべて剥ぎ取り、腕を背後に縛り上げ、

布で眼を覆うのを、鏡郎女は、冷たく見おろしていた。

皇子は、眼隠しをされたまま、女どもに手荒く小突かれながら歩いた。やつと目隠しを外された時、皇子は、暗い一室に、天井の梁から惨めに吊されていた。皇子に相對するかたちで、やや離れて鏡郎女は、椅子に坐し、皇子の左右を、薄い絹の袍をまとい、袴をつけた乙女が二人、挟み込むように立っていた。

——応えよ、と鏡郎女は問うた。汝は、何故に、吾を姦そうとする。

——恋うた女を、と葛城皇子は応えた。姦そうとするに、なんの不思議やある。

応えるや否や、郎女の人さし指が動いた。二人の乙女は左右から、皇子のふぐりを掴んだ。皇子は悲鳴をあげ、激しく痙攣した。

——虚を言うでない。鏡郎女は薄く笑った。

——虚ではない。葛城皇子は苦痛に身もだえしつつ、応えた。

——では、何故に。鏡郎女は問うた。汝は蘇我鞍作を殺す。

——母なる大王とまぐわったため。皇子は応えた。

——またも、郎女の人さし指が動いた。乙女たちは、かわるがわる、皇子の股間を膝で蹴り上げた。

——汝が、鏡郎女は冷ややかに言った。情に動かされる性か。なんの謀あつて、吾を姦す。蘇我大臣を殺す。

——汝の助けが要る……。皇子は、息もたえだえに応えた。伏して頼む……。

鏡郎女の人さし指が、己が唇に当てられた。乙女たちは、二人して、皇子の陽物に口を寄せ、齒を立てた。

皇子は絶叫した。破れた皮から血が噴き出した。

——た……、皇子は声を振り絞った。大業のため……。

郎女は立ち上がり、乙女たちに合図した。乙女たちは、皇子の陽物から口を放し、退出した。

——大業、と言うたな……。

鏡郎女は、皇子の足下に膝を突き、血にまみれた陽物に貌を寄せ、傷を舌で舐めた。

——如何なる大業ぞ……。

——この大和を……。

皇子は、喘ぎつつ応えた。

——唐にも劣らぬ国となす。

郎女は貌を上げ、皇子を見つめた。その陽物は、しだいに雄々しく鎌首をもたげはじめた。

——唐の皇帝はすべての民を統べ、すべての民は皇帝の命に随う。新羅や百済も唐に習い、その王どもは、法によつて強大な権を有している。しかるに大和の大王は、諸々の国の王や豪族どもを統べるのではなく、彼等を望むところを取り持ち、互いに争わぬよう、はからうにすぎぬ。

……。

——新羅と百済の争いは増し、新羅は唐の力を借り、軍を興して百済の版図を侵している。

やがてその勢いは、大和にも及ぼう。大和の大王が、その命で自在に諸国より兵を動かす権を法でもつて定めねば、他国の侵掠を免れることはできぬ。

……。

——そのために、大王とまぐわい大和を意のままにしようとする蘇我を滅ぼし、新たな国を造

らねばならぬ。

……………

——故に、汝等の力がほしい。

——……やつと、言うたな。鏡郎女は、皇子のふぐりを鷲掴みにし、力を込めた。皇子は、弱々しく涙を流し、呻き、悶えた。

——同じ事を、蘇我鞍作も言うたぞ。

——鞍作は、皇子は齒を食いしぱり、叫んだ。己が一族の栄えのみを謀っているにすぎぬ。彼が何をした。母とまぐわい、民を使役して板蓋宮を建てさせ、それだけではないか。吾は違う、吾は……。

ふぐりが平たく変形し、皇子は、血を吐くように叫んだ。

——大和を強大な国とし、百済も新羅も服属せしめ、唐をも攻める！

鏡郎女の手が止まった。ふぐりから手を離し、立ち上がって皇子の貌を見た。

皇子は、さらに叫んだ。

——四海にあまねく、日輪の御稜威を……！

鏡郎女の唇が、みるみる広がり、哄笑した。手を叩き、腰を曲げ、笑い転げた。

——汝が大業とやら、気に入ったぞ！

鏡郎女は、半死半生の皇子を押し倒し、血塗れの陽物にまたがり己が陰に差し入れ、激しく腰を動かし、姦した。

——その兵は如何して集める？

——法を、律令を整え、常に揃える兵士を定め、大王の詔でいつでも動くようにする。

——軍の費えは、如何にして集める？

——等しく民に田を与え、田の広さに応じて税を集める。

——海を渡る舟は如何する？

——淡海や、瀬戸の漁人を集め、水軍として鍛える。

——大和の民は、その詔に随うや？

——随わせる。

——如何して？

——大王の御稜威……。国史、七枝の剣、さらには、海を越えて財を集め、国を富ませ、日輪の女神の栄を言祝がしめ……。

「しばらくは」

葛城皇子は、中臣鎌子に言った。

「かの大王に任せよう」

——吾等が目指す政事の改新は、自然、豪族どもや民の反発を買う。だが、歳月がたてば、豪族も民も慣れる。慣れたところで、遊び好きの大王から、国をまるごと、譲り受ける……。

「それまでは、三輪の土蜘蛛どもは、そのままに置き、しかし、眼を離すな」

葛城皇子は喋り続け、鎌子は黙したまま、頷いていた。ひたすら話を聞き、口を挟まず、頷く、それがこの皇子の信を得る唯一の道であることを、かつて栄え今は衰えた中臣の主は、よく心得

ていた。

「年明けにも詔が出され、新たな職制が宣される。大王の下に、豪族を束ねる大臣が置かれるのではなく、それぞれの功や能に応じ、職位を与える。左大臣は阿部内麻呂、右大臣は蘇我石川麻呂、汝は……」

皇子は、気ぜわしく歩き回りながら言った。

「内臣になるだろう」

内臣……鎌子は口のなかで呟き、やや眼を開いた。中臣の家柄からすれば、異例の拔擢と言える。

「大王の側近くにあつて、政事を輔ける役。難波の王宮で起こったことは……」

皇子は、腰を屈めて鎌子の貌をのぞきこんだ。

「何事によらず、つぶさに吾に知らせよ」

鎌子は頷き、それから問うた。

「大海人皇子は、如何にされたまう？」

「大海人皇子か……」

葛城皇子は、床に尻を据えて座り、しばし考えた。

「まだ十四の皇子。ただ、あれは、どこか汝に似ている」

鎌子はかすかに瞬きした。皇子は続けた。

「自らは言わず、他人に言わせる。油断がならぬ」

言い終えて、葛城皇子は独り呟笑した。

「しばし飛鳥に留めておこう。誰か、汝の一族を、飛鳥古京の留守司として置き、鏡郎女とともに、眼を離すな」

「よいのか？」

村国男依は、酒杯を口に運びながら問うた。

すでに、日は落ち、漆黒の闇が世を覆っていた。舍人どもは、その日の役目から解放され、厨に集い、酒を酌み交わす。

「よいのか、とは？」

いちばん年かさの舍人である置始比等の問いに、こわい頬髭を生やした大男の男依は、分かっているだろう、と言いたげな眼差しで重ねて言った。

「かの乙女よ。姿を見せてから二日、皇子の寝屋から出ようともせぬ」

「巫那か」

海部石床も、杯を床に置き、呻くように言った。

「蘇我大臣に止めを差したのは佐伯子麻呂と稚犬養網田。しかし、大臣のふぐりを握りつぶし、動けなくしたのは、乙女の俳優と聞いた。あの時、皇子は、板蓋宮のただ一つ開け放たれた門を指さして、巫那、と叫びたもうた。門を守っていた兵どもは傷つけられ、立てずに呻いていた。そして、かの俳優は、誰とも知れぬままという」

「しかし、何故に巫那が、俳優に化けて、大臣を……」

村本大國は首をひねった。伊勢の、大海人皇子の宮で、古の物語を、舞いつつ語った巫那。



二見浦の浜で、海の彼方より昇る日輪の光を浴び、神さびた姿を見せた巫那。

「皇子はおそらく……」

置始比等は言った。

「それを知りたまいつつ、かの乙女を寝屋へ入れられた。吾等が憂えることではない」

「皇子よ」

褥のなかで、互いの裸身を抱きながら、巫那は、囁きかけた。

「このような夜を、ずっと待ち望んでいた」

十三になり、早くもふくよかな実りを見せる乳房を、皇子の薄い胸板に押しつけながら、巫那は、皇子を覗き込むようにした。

「吾も」

皇子も巫那も、初めてのまぐわいであった。ひどくぎこちなく、快をともにする間もなく果てた二人は、しかし、互いの心の裡を確かめ得て、満ち足りていた。

「このまま、いづくにてもよい、二人で過ごしたい」

「明日は行かねば……」

巫那は、寂しげに呟いた。

「また、土蜘蛛に戻る。されど……」

——男依も大国も、石床も、吾と貌を合わせても、眼を逸らすばかり……。そう呟き黙した巫那の髪を撫でつつ、皇子はその白い頬に唇を押し当てた。巫那は、眼をつむり、声を震わせた。

「吾を、伊勢の浜で育った巫那と思うてくれるのは、皇子ただ独り、故に」

巫那は、皇子の首にしがみついた。

「夜明けまで、こうやっていたい」

翌朝、皇子が眼を覚ますと、巫那の姿はなかった。舎人どもも、女孀どもも、宮を出て行く彼女を見た者はいなかった。

皇子は、宮を走り出た。門をくぐり、外へ出た。広々と、稲穂が青く、豊かな実りを見せていた。

胸から熱いものがこみあげ、皇子の頬を涙がつついた。

その時——。

遠くから馬蹄が響いてきた。一騎ではなかった。道の遠くに、土煙があがり、大王家の旗を掲げた騎馬の兵が二十ばかり、こちらに駆けてくる。

何時しか、門前には、馬蹄を聞いて飛び出してきた舎人どもが群をなした。

「皇子、あれは……」

置始比等が、騎馬兵どもを指さした。

「あの旗幟は、葛城皇子の旗」

「大海人皇子よ！」

門前に馬をとめた葛城皇子は、銀に輝く甲冑、紫色の巾をつけ、螺鈿をちりばめた長剣を提

げ、地に降り立った。

「兄なる皇子よ、如何いかがされた」

前触れもなく兵を引き随つれての訪まないに、大海人皇子は動揺しつつ問うた。

「いま、吉野より戻った」

葛城皇子は、兜かぶとを脱はぎながら応えた。

「古人皇子は、ぶじ、討うったぞ」

難波に戻れば、何かと忙しい。久しぶりに飛鳥で、蹴鞠けまりでもしようと思つて立ち寄った、という葛城皇子の言葉に、馬を下りて拝礼する二十の兵を見遣みった。そのなかに、板蓋宮で蘇我鞍作のとどめを刺した佐伯子麻呂や稚犬養網田の貌も見えた。

戦勝を言祝ぎつつも、大海人皇子は、ひどく苦い瘡しじりが喉のあたりにこみ上げるのを覚えた。古人皇子とは、とくに近いわけではなかったが、見掛けた折りの清々しい振る舞いを好もしく感じていた。

宮に招き入れ、湯を沸かして差し出させた。葛城皇子は、甲冑を外し、布で旅塵りよじんを拭ぬぐいながら言った。

「汝はしばし、ここに留まれ」

大海人皇子が問い返す前に、葛城皇子は口早に告げた。

新たな政事が始まる。官位のありよう、税のありよう、豪族どもの地位、すべて唐に倣ったものになる。となれば、豪族どもや民の反発や離反も予想される。再び争いさい争いさいが起ころう。

「豊日大王が、争いさい争いさいを捌はけるとも思えぬ。吾は、難波で大王を輔たすけ奉るが、やがては支え切

れぬ時も来よう。而して、弟なる皇子よ、汝は吾が唯一はらからの兄弟」

父なる田村大王は、男子の御子を二人しか授からなかった。それだけに、母は異なるとはいえ、ただ独りの弟である大海人皇子の存在は心強い。

「やがて、吾と汝が、手を携え、新たな国造りを行う時も来よう。それまでは、汝が難波での政争に巻き込まれ、世の譏そりを受けることは避けたい」

吾はすでに、板蓋宮で己が手を血で染めた。さらには吉野宮にて、古人皇子を斬った。世の譏りそりは怖くない。しかし、新たな国造りを進めるには、「穢けがれていない手」も必要なのだ……。

淀みなく語る葛城皇子の言葉を、大海人皇子は、黙したまま聞いていた。異母兄の言葉は、その半ば真実であるうし、半ばは、語られぬ意図を覆い隠すための言辞であろう。

ただ……飛鳥に留まることは、巫那みよのいる三輪の近くに留まるということ。胸の奥底から沸き上がる歓びが、皇子の頬を緩めさせた。

「飛鳥には、別に留守司を置く。汝は、しばし政事には関わらず、気ままにしていればよい。ただし……」

葛城皇子は不意に声を潜めた。

「密かに、伊勢を探れ」

伊勢？ 訝いぶしげな面持ちとなった大海人皇子に、葛城皇子は問うた。

「汝は、七枝の剣を知るや？」

七枝の剣……。皇子の脳裡に、蘇我鞍作の言葉が蘇った。



七枝刀(石上神宮所蔵)

——劍の左右の端から、それぞれ三本の刃が枝のごとく生え、大和の大王家の祖たる日輪の女神が地上に降り立ち、国を統べるべき者に与えた神劍。

——かつては、国栖にあつたと、蘇我が邸に蔵せる国史には記してあつたが、今はいづくにあるか知れぬ。しかし、その劍は、大王家の御稜威を、より盤石にし奉る……。

「否」

咄嗟に、驚くほど滑らかに、大海人皇子は首を振っていた。

葛城皇子が語り始めたる七枝の劍の来歴は、蘇我鞍作の語つたそれとほぼ同じであつた。

「汝が表立っては動くな。心きいた舍人などを伊勢に遣わし、それとなく探れ。また、劍の在処がわかつて、すぐには誰にも言うな。まず、吾に報せよ」

刺すような葛城皇子の眼差しを、しっかりと見返しつつ、大海人皇子は頷いた。

伊勢に行こう……。そう、心に定めた。

伊勢で、阿礼に問おう。

冬が近づいていた。

海から吹き付ける荒い風が樹の茂みを鳴らし、磯に砕ける波音と混じって凄まじく、洞の奥深くにも木霊していた。

「やはり、来たか」

阿礼は、焚き火を熾し、瓶を据え、干し飯を水に浸して入れ、干した魚の身をくずして振り入れながら問うた。

「汝が父なる田村大王のこと、どれだけ知った？」

大海人皇子は、飛鳥で見聞きしたことすべてを語つた。巫那のことは除いて……。伊勢の浜で拾い育てた乙女が、三輪の箸臺で土蜘蛛となったことを告げるのは、辛かつた。

「吾が父は、大和を開いた飯豊大王の血筋から大王の御位を篡奪し、吾が異母兄は、唯一残つた飯豊の血筋たる古人皇子の一族を滅ぼした」

「己が父が、大王位を篡奪したことを、汝は如何思うぞ」

「わからぬ……」

「汝を生んだ父なる大王が、狡猾で獐猛、欲しいものは非道な手だてを使つても手に入れる男であるを知つて、辛くはないか」

「……もともと、貌も知らぬ父」

大海人皇子は、呟くように言った。

「何とも思わぬ」

阿礼は、頷き、他に問いたいことがあるのではないかと促した。

「兄なる皇子が、国栖の地にあつたという七枝の剣を求めている」

蘇我鞍作も求めていたが、手に入れぬままに討たれた。阿礼は、この剣について知らぬかと問う大海人皇子に、阿礼は問いを返した。

「汝は、七枝の剣が、葛城皇子の手に渡ることを望むや？」

皇子は首を振った。阿礼はかすかに微笑んだ。

「何故に」

「危うきが故に」

「何が危うい」

皇子はしばし考え、口を開いた。

「この国を統べるに相応しい者にこそ、七枝の剣は与えられるべき」

言い終えて、はっと驚いた。明らかに次の大王位を狙う葛城皇子は、しかし、その地位に相応しくないと言いつつ切つたに等しい。

「ならば」

己の心の裡に潜んでいた意を口にして戸惑う皇子に、阿礼は言った。

「語るまい」

やがて、瓶のうちで粥が煮えた。木の椀に注いで啜つた。皇子は、もう一つ、問いたいことがある、と切り出した。

「何か？」

「吾が母のこと」

粥を口に運ぶ阿礼の手が止まった。大海人皇子は、膝を乗り出した。

「是非にも、知りたい」

阿礼はじつと俯いていたが、やがて貌をあげた。

「汝が母は、五十鈴川の畔に住まう、巫女」

五十鈴川の畔……。かつて巫那から聞いた、日輪の女神、天照。その女神を崇拜する民がいる邑。

彼等は、日々の営みを巫女の託宣に委ねる。代々、稗田の姓を名乗った巫女の一族の独りが、阿礼であった。

阿礼の語りは続いた。

「十五年も前、田村皇子が伊勢に現れ、十五になるその巫女を無理強いに姦した」

両膝を握りしめた大海人の手が、細かく震えていた。

「巫女は、姦されつつも、田村皇子のふぐりを、二つながらに砕いた。そのとき、精が巫女の陰を濡らし、子を孕んだ」

「その子が……吾」

かすれた声で問う大海人皇子に応えず、阿礼は続けた。

「田村皇子の舎人どもによつて、巫女は眼を潰された。やがて巫女は、男子を生み、そのまま邑を追われた。田村皇子は、命ばかりは取り留め、都に戻りて大王となった。しかしその後、御子には恵まれず、故に、葛城皇子と汝の二人のみ」

「その巫女は、今は……」  
立ち上がって詰め寄る皇子を、阿礼は手で制した。  
「巫那は、父も母も知らぬ。しかし、あの乙女は強い」  
阿礼は、見えるかの如く、開かない瞼を皇子に向けた。  
「汝もまた……強くあれ」  
その瞼から、涙が滴り落ちるのを、皇子はじっと見つめていた。

——強くあれ。

然り。

強くならねば。

崖下で待っていた海部石床と肩を並べて砂浜を歩みつつ、皇子の脳裡に、阿礼の言葉が幾度も幾度も鳴り響いていた。

巫那は土蜘蛛となった。土蜘蛛とならねば、宝大王の宮で采女となっていたであろう。どちらをより、巫那は希んだか。人に姿を見せてはならぬ采女となっていたら、再び皇子と会い、まぐわうことができただろうか。

巫那は土蜘蛛として技を磨き、みごと蘇我鞍作を討った。鏡郎女の信を得、故に三日とはいえ、箸墓を離れ、皇子と過ごすことを赦された。

「石床よ」

皇子は言った。

「汝はこの伊勢に留まり、七枝の剣について探れ」

「諾」

石床は頷いた。皇子は重ねて命じた。

「ただし、その在処を探り当てずともよい。時を稼げ」

吾が強くなるまでは、剣は埋もれたまま、世に出てはならぬ……。

やがて、日輪の女神の国を継ぐまでは。

そうであるう？

皇子は振り返り、禁忌の崖を見上げ、心の裡で問うた。

母なる巫女、稗田阿礼よ……。